

よく考えてみると、これだけ多数の史籍を提示されたことは、明代史の研究者にとっては、どれだけ大きな恩恵であるかわからない。解説がなく、書名が示されているのみでも、それを基にして自ら探索すれば得る所大きい筈である。中国前近代史を研究する学徒にとって本書は、すこぶる便利なハンドブックであるが、殊に明史研究者にとっては、より一そう有益な工具書である。わが国なるべく多くの研究者によって、本書が活用されることを望んでやまない。

最後になってしまったが、第九章の執筆者の一人、曹貴林氏より去る七月下旬に、筆者は本書を恵送された。曹氏は歴史研究所の研究員で、これまで明代史に関する多数の論稿を発表している、博学の明代史家である。曹氏の深い学識と鄭克晟氏の協力によって、本章が完成されたに違いないと確信する。

(A5判、四七六頁、北京出版社、一九八三年一月刊)

#### 〔追記〕

本稿を起草した後に、南開大学歴史系の鄭克晟氏からも本書を寄贈された。曹・鄭両氏の御厚情に心より感謝する次第である。

王德毅・李栄村・潘柏澄編

#### 元人伝記資料索引

大島 立子

一九七九年の第一冊目の刊行より以来、久しく待たれてきた王德毅・李栄村・潘柏澄編『元人伝記資料索引』(以下王氏等編)が、ようやく今春、第五冊目の発行をもって完成した。

元史研究にとって、多大な便宜をもたらすであろう本書の刊行は喜ばしいことである。王氏自らが、その序に「俗語云『工欲善其事、必先利其器』。索引便是研究学問的一種利器、可以幫助研究者用最少的時間獲最多的史料」と述べているが、本書もまた利器としての機能を充分に果し得るものである。本書の編纂は一九七五年にはじめたと言うが、短期間に多量な史料を使い、大部な索引を完成させた編者諸氏の勞をねぎらいたい。

元人の伝記索引は、既に各種出版されている。最初に編纂されたのは、哈仏燕京学社引得第三五号『遼金元伝記三十種綜合引得』(一九四〇年。東方学研究会日本委員会再印、一九六〇年)である。本書は、遼・金・元代に関する主として官

撰の史料における伝記の所在箇所を示したものであり、別号あるいは標記の相違をも記している。

第二に出版された朱士嘉編『宋元方志伝記索引』（中華書局、一九六三年）は、題名から察せられる如く、宋・元時代刊行の地方志三三種に記載された伝記の索引であり、所在箇所のほか、別名・字号をも記す。ただ、元代刊行の地方志が少ないこともあって、宋人が中心になっている。

Igor de Rachewitz, Miyoko Nakano and May Wang, *Index to Biographical Material in Chin and Yuan Literary Works*, 3 series (Austrian National University Press, 1970, 1973, 1979) は、金人・元人の伝記を、金・元時代から、明・清・現在に至るまでの文集、野史、金石文・地方志等の編纂もの、及び陳垣『南宋初河北新道教考』（輔仁大学叢書第八、一九四一年）のような研究書の類など、第一巻は二二種、第二巻は六五種及び永樂大典、第三巻は一一五種、総計二〇二種を使用し、字号・別名・所在箇所のほか、ある者は本貫をも記載してある。本書の特徴は前二者に比べ使用史料が多岐にわたり、豊富であるばかりでなく、時には伝記として記載されていないものでも、個人の事跡を示すものは収録していることである（例、愛薛、『通制条格』）。ただ、本書の三巻は各々独立したものであるため、同一人名を調べるために三冊とも必要とし、そのために蕭啓慶氏も言

う如く使用しにくい（王氏等編、第五冊、五三〇頁）。

梅原郁・衣川強編『遼金元人伝記索引』（京都大学人文科学研究所、一九七二年）は、Rachewitz氏等編の第一冊と第二冊の刊行の間に上梓されたものであり、哈仏燕京学社編のもの欠を補うものとして編纂されたことは、前記二種と同じである。採録のために利用した史料は、金人・元人の文集に限り、一三二種とその数も少なく、従って掲げられた人数も少ない。しかし、本書では、字号・別名と所在箇所を記すのみではなく、伝記の題名、籍貫、生卒年、及び曾祖・父・子孫・姻戚関係をも記し、当時の人脈の一環を知る上にも便利である。この点が既刊及び、以下に述ぶるこれ以降に刊行されたものと異なる。

陸峻嶺編『元人文集篇目分類索引』（中華書局、一九七九年）は、一七〇種の文集を使い、人物・事象・藝文類の項目に分類し、第一の伝記の項が伝記所在索引となっており、字号・別名・伝記題名をもあわせ記す。女性・僧道及び姓しか記されていないものは、各々項を別になててある。

ほかに、衣川強編『宋元学案・宋元学案補遺人名字号別名索引』（京都大学人文科学研究所、一九七四年）があり、元人の伝記索引としても利用できる。

以上六種の索引の後に刊行された王氏等編のものは、いか

なる構成で、どのような特徴を持つものか。

本書は、同じ王徳毅氏が中心となって編纂された国立中央図書館編『明人伝記資料索引』上・下（一九六五・六六年）、及び『宋人伝記資料索引』（全六冊）（鼎文書局、一九七四—一九七六年）の姉妹編といえるもので、これら二編と同様に、単に所在箇所を記す索引にとどまらず、人名辞典としての機能をも果そうとしている。この点において、先行する諸索引と大いに異なる。しかし、本書の主眼はあくまでも伝記所在索引に置かれ、人名辞典ではない。従って、伝記あるいは個人の業績を中心に記載されていない記事は省かれており、Rachewitz編と異なる所以である。また、漢文史料のみを対象にしているために、歴史的に重要である渡来ヨーロッパ人等についての記載も、マルコ・ポーロ以外はなく、この点からも人名辞典としては使用できないことがわかる。このことを利用者の側は知っておくべきであろう。

記載項目は、生卒年、字号・別名、本貫を含む略伝と、所在箇所及びその題名である。構成は、第一巻から第四巻前半まで二〇一頁は、姓の画数の順に排列され、モンゴル人、中央・西アジア及びヨーロッパ人等の漢人の姓の範疇にないものは、項を別にし、第四巻後半にアルファベット順に排列してある。元朝諸皇帝については、一括して元の字の項の末尾に帝位に即いた順に記載してある。第五巻は別名字号封諡

索引となっている。

本書に利用されている史料の豊富さ、種類の幅の広いことは、既刊の諸索引をはるかに凌駕している。即ち金代から現在に至る著作、編纂書、八三五種のほか、現在中国人による研究論文までも使用している。従って扱われた件数も一六〇〇〇人を越えている。ただ、研究論文をも使用した以上、中国人のもののみではなく、日本人・欧米人の研究をも採用したならば、より充実したものとなったのではあるまいか。それにより、本書の人名辞典としての機能が、更に発揮できたことと思われる。

最後に若干の不備をあげておきたい。

独立した伝記あるいは業績の記事を持つものは、率ね親子であつても各自項をたてているが、中には一つの項目に妻・子孫について附加されているものもある。例えば、耶律楚材の長子鑄の項には、妻粘合氏、子希逸等が記され、朱清の項には、四子と、第二子の妻茅氏が含まれている。各自別項のもの、附加されているものとの統一がないことは利用しにくい。特に妻の場合、姓が夫と異なるために、該当の姓の項でもとめられない時、その記載箇所を捜すことは難しく、見落す恐れが大である。該当の姓の項に、記載箇所に指摘する注のほしいところである。

また、非漢人の姓名の漢字音写は、正史あるいは清代以前

に刊行された史料に基づき、清代に改訳されたものはとらな  
いと凡例にある。正史の音写は清代に改訳されており、この  
凡例に矛盾があるが、これは一般に通行している正史を基準  
にすることが種々の面で便宜であることからうなづけられ  
る。しかし、各項目において、異種の音写について一切ふれ  
ていないのは何故か。非漢人の姓名は、元代当時にあつても  
種々の漢字に転写されている。例えば、姦臣として名高いサ  
ンガについていえば、桑哥・相哥・争哥とある。果していず  
れのが広く通行していたか判断できない。ひとつだけを  
選択し、その文字以外では当該人物の項を引き出すことがで  
きないのは不便である。また、皇帝の名についても、鉄木真  
の項には太祖を見よとの指示はあるが、成吉思・忽必列の項  
は全くない。即ち非漢人の項については、利用しにくい所が  
目立ち、非漢人について特に項を別にした本書の効果を半減  
しているのは残念である。

以上いささか欠陥をも述べたが、もとよりそれによつて本  
書の価値が減ずるものではなく、今後の元史研究に貢献する  
こと大なることを確信する。

(新文豊出版公司、一九七九—一九八二年刊)

黄仁宇著

## 万曆十五年

佐藤 鍊太郎

本書は、Huang, Ray. 1587, *A Year of No Significance*.  
(一九八一年、米國エール大学出版)の中国語版である。著  
者自身が意識し、中国社会科学院文学研究所の沈玉成氏が  
校正潤色したもので、題簽は廖沫沙氏の揮毫である。

初めに著者の研究歴を紹介しよう。黄氏は中国に生まれ、  
三十余年前に渡米した。そして、一九五九年以降五年間、ミ  
シガン大学で「明代の漕運」をテーマに研究し、博士論文を  
完成した。その後、明代の財政税役制度の全貌を窺うべく資  
料の収集に努め、『明実録』、奏疏筆記、各地方志、研究書を  
読破し、七〇年には『Military Expenditure in Sixteenth-  
Century Ming China』《Orkens Extremus》17. を発表  
した。また、七二年には英国に渡り、ケンブリッジ大学で、  
ジョセフ・ニーダム博士主宰の『中国科学技術史』の編纂に  
参画し、七四年には博士と共に *The Nature of Chinese  
Society: A Technical Interpretation*. を著わし、その後は  
七年来の研究成果として *Taxation and Governmental*